日機連かわら版

第２１０号

2023年３月２８日（火）

目　次

■業界得々便 ・・・・一般社団法人 カメラ映像機器工業会
「 花の写真コンテスト 」作品募集のお知らせ

■かわら版・歳事記 ・・・・・「 春爛漫 」 ～ 桜と散歩 ～

■お知らせ

かわら版バックナンバー

日機連ではホームページを開設しておりますのでご利用下さい。
http://www.jmf.or.jp/　（禁無断転載）

一般社団法人 日本機械工業連合会　東京都港区芝公園３丁目５番８号 機械振興会館 03-3434-5381

業界得々便

(一社)カメラ映像機器工業会からのお知らせです。

「花の写真コンテスト」

作品募集のお知らせ

主催：一般社団法人カメラ映像機器工業会

詳細はコチラから

バナークリックで公式ウェブサイトに

対象となる植物は野の花、植物園の花、街路の花、ドライフラワー・・・など全ての花・植物。デジタルカメラのほか、スマートフォンで撮った写真も対象となります

写真テーマ：花・植物 花・植物をそれ以外の被写体と組み合わせた写真も対象

応募方法：メール

締め切り：2023年6月7日(水)

作品募集中

かわら版・歳事記

春爛漫 ～桜と散歩～

東都上野花見之図　国立国会図書館

最近の地球温暖化の影響かどうか知らないが、今年も平年より早めに春が訪れたような状況である。３月中旬から４月始めに掛けては、やはり桜の開花が一番の話題になる様である。

◆早い東京の桜開花

３月に入り全国的に気温の高い日が続き、とくに関東、東北、北陸の一部では３月上旬の日平均気温が平年の＋4℃を越えるなど、その頃から今年の桜の開花、満開はともに例年より相当早くなるなどと言われていた。予想に違わず東京(靖国神社)は３月 14 日に開花し、これは 2020 年、2021 年と並ぶ最も早い開花という。さらに東京の満開は３月 22 日となり、平年(３月 31 日)より９日早く、2002 年の３月 21 日に次ぐ、過去２番目に早い満開となった。

この歳事記を読まれる頃は東京の桜は既に散り始めているかも知れない。桜については以前にも本誌で書いたことがあるが、やはりこの時期は桜について触れないと歳事(時)記とならない。なるべく重複しない範囲で書いてみる。

◆花見の大衆化は元禄時代

日本人は桜が大好きである。これは平安の昔からのことで桜の咲く時期が近づくと、まさに在原業平朝臣（ありわらの　なりひら　あそん）の「世の中に　たえて桜のなかりせば　春の心は　のどけからまし」という和歌に歌われた心持ちである。

もしも世の中に全く桜がなかったなら、いつ咲くのかいつ散るのかと心惑わすこともなく、春を過ごす人の心はどれほどのどかであろうかということである。

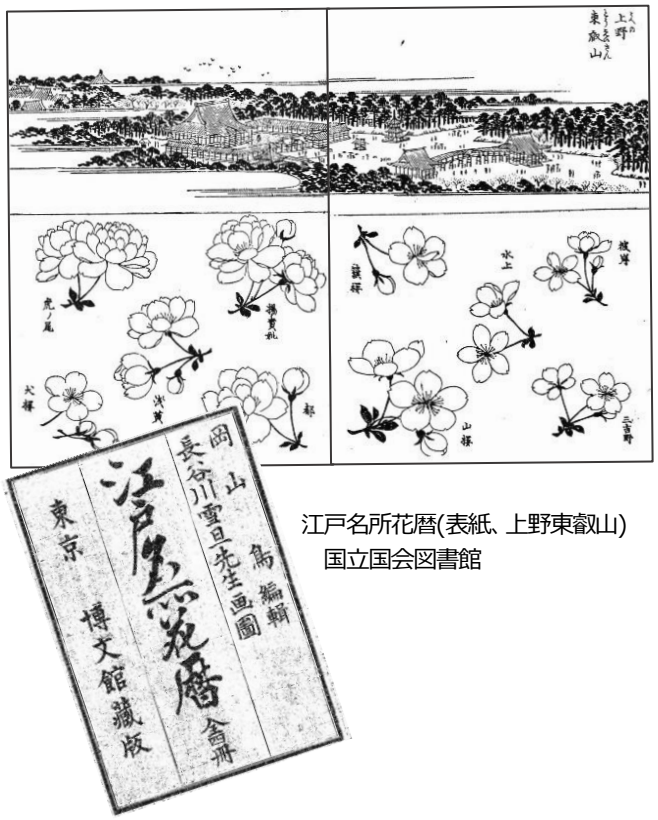
花見の習俗は古くは宮中、貴族社会あるいは武家社会などの特権階級の雅な宴、または農山村社会で五穀豊穣を願った農耕儀礼として執り行われてきた。

花見が娯楽として大衆化したのは江戸時代の元禄時代以降頃(江戸中期５代将軍綱吉の時代)からで、上野、飛鳥山(北区南部の台地)、向島、小金井などが行楽地として全盛を極めたという。

また、これらの桜の名所の整備に力を入れたのは、８代将軍吉宗であることはよく知られている。

◆江戸の花見のガイドブック、
江戸名所花暦と江戸名所図会

江戸時代の文政10年(1827)に刊行された「江戸名所花暦」別名「江戸遊覧花暦」は春夏秋冬の草木花の名所を紹介したガイドブックで、月や雪、鳥、虫の名所なども収録されている。



江戸名所花暦(表紙、上野東叡山)
国立国会図書館

また、少し遅れて天保5年～7年(1834～36)に刊行された「江戸名所図会」も江戸の神社・仏閣・名所・旧跡の由来や故事などを説明した7巻20冊に及ぶ江戸の地誌であるが、その中にも花見の名所がいろいろ紹介されている。

現代でも大勢の人で賑わいを見せる上野も、上野清水堂不忍池などと紹介されている。

ただ、上野は徳川家の菩提寺である寛永寺の境内であるため楽器を打ち鳴らしての飲めや食えやの大騒ぎは御法度で、暮れ六つ(午後六時頃)の鐘とともに山門が閉ざされ、夜桜見物は禁止で見物人は追い出されたという。

一方、他の名所では夜桜も楽しめ、上野を閉め出された人も含め、浅草、隅田川堤、御殿山、飛鳥山、新吉原などに人々は夜も繰り出したという。

名所江戸百景　隅田川水神の森真崎　国立国会図書

◆江戸情緒溢れる半七捕物帖

先日、岡本綺堂著の「半七捕物帖」を読んでいて、半七親分とその妹お粂との3月のある日の会話に、妹が半七に数日後に飛鳥山(現在の北区王子)に花見に行こうと誘うくだりがある。半七の住んでいる神田三河町(現在の千代田区内神田一丁目と神田司町二丁目付近)から飛鳥山は少し遠いが、妹はいつものお仲間と行く向島は酔っ払いや浪人の素っ破抜きが多く、最近雰囲気が騒然としているので、今年は飛鳥山にしたいという。

半七のこの話(異人の首)は幕末の文久元年(1861年)のことである。安政6年(1859年)には横浜が開港され、これに反対する攘夷派の志士・浪人などが攘夷のための軍資金の調達と称して、江戸の大店に押し込み強盗を行う事件などが起こって物騒になっているという。

作者の岡本綺堂は明治5年(1872)東京生まれで、新歌舞伎作者の第一人者で優れた劇作家でもある。彼は文久や安政年間には生まれていないが、江戸市井の生活に関する造詣が深く、時代考証にも優れているので、おそらくこのような状況であったろうと思われる。

◆我が町の桜満開も間もなく

桜の季節が進んでいる一方で春の訪れは着実に進んでいる。暖かくなったので、普段の散歩も冬の頃の季節風や寒さに阻まれることもなく、ゆっくりと時間を掛けて歩いていける。

冬の間はほとんど行かなかった利根川の土手も風もなく日当たりもいいので、よく行く。筆者の住んでいる利根川の土手の上には町で整備を進めている桜堤があり、20 年以上前から住民が桜の苗木の里親(オーナー制度)になって育てている。

当時の 1 メートル前後の苗木も今では立派な樹に育っている。こちらは満開となった東京と違い、まだ四分から五分咲きのようである。土手の上で車も通らず散歩やジョギングに最適で多くの町民が利用している。

利根川土手の桜堤

新型コロナ感染症の新規感染者もこのところ全国的に減少傾向が継続しており、各地で花見などの行楽もコロナ以前の規模で行われつつあり、喜ばしい限りといえるだろう。

(猫じゃらし)

お 知 ら せ

◆表紙の写真

トラフズク♀(虎斑木菟)

埼玉県加須市（2022 年 4 月撮影)

撮影 渡邉俊文さん

（元日本精密測定機器工業会 専務理事）

◆ご意見募集

日機連では、今後の活動の参考にさせて頂くために、会員の皆様からのご意見、ご要望をお待ち致しております。

また、「日機連・かわら版」に対するご質問、ご意見や日機連の活動に係る全般的なご意見、ご要望など下記までメールをお送り頂ければ幸いです。

メールアドレス koho@jmf.or.jp